The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アカデミック・ライティングにおけるピア・レスポンスによる学習者間の相互行為とその学び―社会文化理論の視点に基づくスキャフォールディングの分析から―
Author(s)	蔡, 苗苗
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/103114
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　蔡　苗苗　　）	
論文題名	アカデミック・ライティングにおけるピア・レスポンスによる学習者間の相互行為とその学び ―社会文化理論の視点に基づくスキャフォールディングの分析から――

論文内容の要旨

本研究は、大学院進学希望者の研究計画書作成というアカデミック・ライティング（以下、AW）課題にピア・レスポンス（以下、PR）を取り入れた協働学習活動において、社会文化理論の視点に基づくスキャフォールディングの分析を通じて、学習者間の相互行為の特徴とそれによって構築された学びの状況を明らかにすることを目的とした。

序論では、今後さらに増加が見込まれる大学院進学希望者に対して、大学・大学院間のアーティキュレーション（接続）を円滑に実現するため、日本語AW教育の一環として研究計画書作成やテーマ設定への適切な支援の重要性を述べた。「対話」を重視する日本語教育が進んでいる中、彼らが直面する研究計画書作成やテーマ設定に関する困難・課題への支援策として、他者との対話的活動に主体的に参加できる場の構築を提示した。PRをはじめとする協働学習は、学習の社会的側面や他者の存在を重視し、学習が他者や環境との相互行為の中で間主観的に構成されるという構成主義的な学習観に基づくものである。また、協働学習における学びの捉え方として、単に産出された成果物をもとに評価するのではなく、創発的な社会的相互行為の視点からその過程を論じる必要があることを論じた。

第2章では、先行研究の概観を行った。まず、ピア・ラーニングの理論的背景、日本語教育における多様なピア・ラーニング実践、その意義と課題について紹介した。次に、本研究の焦点であるPRの理論的背景を説明し、協働学習としてのPRが認知的観点と社会的観点の両面から意義を持つことを示した一方で、潜在的な課題も存在することを提示した。また、PRに関する先行研究を概観し、PR活動のプロセスやその中で展開される相互行為のあり方に着目した研究を検討した。学習者間の相互行為がどのような学びの状況をもたらしたのか、相互行為と学習・発達との関係については、十分に検証されているとは言い難いと考えたため、PR活動における学習者間の相互行為を分析するには、新たな視点が必要であることを論じた。さらに、日本語AW教育への応用を目指したPR実践の広がりや、ICTを活用した遠隔協働の可能性について述べた。研究計画書作成支援を目的としたPR実践は少なく、受講生による教室活動の評価の結果や活動後の文章プロダクトの分析により、PRが研究計画書作成支援といったアカデミックな教育活動への応用可能性とその有効性が見出されている。しかし、活動のプロセスで具体的に何が起こっているのか、学習者間の相互行為の進行そのものについてはまだ十分に解明されていないことを指摘した。その上で、今後の研究では、AW教育の文脈において、相互行為自体の種々の局面での学びや援助行動に焦点を当て、PR活動における学習者間の相互行為によってもたらされる支援の可能性と、それによって構築される学びの状況を再検討する必要があることを提示した。

第3章では、本研究の理論的枠組みとして、ヴィゴツキーの発達観に基づく社会文化理論を説明し、「発達の最近接領域」、「スキャフォールディング」、「概念発達・変化」の3点について詳述した。スキャフォールディング（以下、Scf）の拡張として、協働学習のもとで学習者間の相互行為を通じて互いの発達の最近接領域に働きかけ、双方向的な支援が可能であることを踏まえ、本研究では、PR活動において相互に提供されたScfに焦点を当てて学習者間の相互行為を分析することにした。さらに、Scfに関する先行研究を概観した上で、本研究の研究課題を示した。研究課題①：PRにおけるScfを介した学習者間の相互行為はどのように行われているか。研究課題②：グループ間の比較を通して学習者間の相互行為の特徴と相違はどのようなものか。また、これらの特徴と相違に影響を与える要因は何か。研究課題③：学習者間の相互行為によってどのような学びが構築・促進されているか。

第4章では、研究方法について記述した。本研究で実施した研究計画書作成支援の学習活動および調査協力者の属性を提示した後、学習活動に取り入れられたPR活動の目標、筆者の関与の仕方、PR活動の進め方に関する実施手順を説明した。さらに、調査で収集したデータの概要と、研究課題3点の各々で使用したデータについて示した。

第5章では、Scfに焦点を当て、PR活動における学習者間の相互行為の特徴を明らかにした。まず、Scfの定義と分類が多様で不明瞭な現状を踏まえ、学習者間の談話データを分析し、既存の先行研究を検討することで、AWにおけるPR活動の文脈に適した新たな分析の枠組みを設定した。この枠組みは、《方向付け》《解決策提示》《発想・思考の支援》《修正示唆》《不安の軽減・動機付け》《発言行動補助》という6つのScfの目的と、「ヒントの提示」「質問」

「確認」「説明」「換言」「要約」「承認付与」「褒め/勇気付け」という8つのScfの方法によって構成される。Scfと認定した具体例とその種類を示した上で、内容の確認に終始してやり取りが進まなかった例や、読み手（援助者）が書き手（被援助者）の新たな理解や思考の構築をサポートしようとしたものの、被援助者の対抗や受容不足、援助者の不適切な意見、あるいは各自の意見の固執によって対話が収束し、結果としてScfが十分に機能しなかった例も見られた。設定したScfの分析枠組みと認定基準に基づいてコーディング作業を行った結果、《方向付け》が最も頻出し、次いで《解決策提示》《発想・思考の支援》《修正示唆》が高い頻度で観察された。一方で、《不安の軽減・動機付け》《発言行動補助》は、4グループすべてにおいて相対的に低い出現頻度を示した。また、談話データの前後の文脈踏まえて分析した結果、Scfの機能として、1）開かれた対話の構築、2）認知的問題の解決、3）他者の内省と自己修正の促進、4）対人関係の維持・調整、5）意味交渉プロセスの促進、の5点が確認された。対話において、援助者は被援助者の反応や理解状況に応じて、Scfの目的と方法を柔軟に変更しながら、自分の発話を調整しようと努力した足跡がうかがえる。また、Scfの生成は、被援助者の積極的な応答や主体的な援助要請によって誘発され、両者が協働して構築していく場面も確認された。このように、Scfは援助者の一方的な判断による行為ではなく、被援助者の発話や行動に応じて動的に調整・構築されるものであることが示された。

第6章では、第5章に引き続き、Scfの分析を通してグループ間の相互行為の特徴を比較するとともに、グループ間の相違をもたらした要因を明らかにした。まず、3つのグループが行った4回のPR活動における学習者間の談話データに焦点を当て、Scfの出現頻度、種類・談話展開、対象という3点から、グループ間の比較を通して、学習者間の相互行為にはどのような特徴と相違が見られるのかを分析した。その結果、グループ1は活動の1回目からScfが活発に行われており、その活発さは活動を積み重ねても一貫して持続していた。その一方で、グループ2・3は一時的にScfの生成が沈滞していたが、活動の進行とともに後期に活発化していった様相が認められた。また、グループ内の相互行為を通した概念変化や問題解決が行われていることは共通しているものの、その過程におけるScfの種類と対象には明確な違いがあることが明らかになった。次に、グループ間の相違が生じた要因を考察するために、相互行為の談話データに加え、PR活動後に記述してもらった振り返りシートやフォローアップインタビューもデータとして使用し、複数のデータを行きつ戻りつしながら学習者自身の行動や意識に関わる部分を抽出して質的に分析した。その結果、学習者の主体性、予備知識・意識の違い、調査者の働きかけという3点が影響していることが分かった。

第7章では、学習者間の相互行為による学びがどのように引き起こされたかを、日本語AWに関する学びの促進と研究テーマの深化という2つの側面から分析した。まず、PR活動の中で日本語AWに関してScfを行う際に注目されている対象は、引用、文体と表現、論理展開と構成、その他、の4点が見られた。Scfの談話展開について、Scfの対象ごとに分析・整理した結果、AWに関する概念変化や問題解決の過程では、《解決策提示》《修正示唆》《方向付け》を中心にScfが展開されており、談話展開が比較的短く収束する傾向にあることがうかがえる。Scfに着目した談話分析を行った結果、Scfを介した相互行為は、学習者が自身の問題点を意識化し、理解を深めることに繋がることが確認された。PR活動において、教師が常に介入せずとも、学習の難易度が高いと思われる引用や論理展開についてもScfを介した相互行為が展開されており、AWに関する学びを促進する対話の場として機能していることが示された。また、PR活動において学習者が自身の研究テーマをどのように深化させていくのかを、ヴィゴツキー（1934/2001）の概念発達の理論を参照し、学習者間の談話データをトランザクション対話分析のカテゴリーに基づいて分析・考察した。学習者Aを事例として取り上げ、彼女の研究テーマを巡って行われた談話データに注目した。分析の結果として、最初に、Aは自身の学習経験に根差した研究テーマを生成したが、研究テーマを構成する概念間の関係が経験的結合のみに依拠して体系性を欠くことに対する認識が十分ではなかった。談話データの分析から、Aが他者と対話する過程において、自身の研究テーマを構成している概念間の関係の解釈の【矛盾】に気付き、自他の意見を【拡張】【統合】し、新たな解釈を生成することによって概念変化が引き起こされ、自身の研究テーマが深化していく過程が可視化された。

最終章である第8章では、PR活動における学習者間の相互行為のあり方を検討し、SCTの視点から見たPR活動の意義を示した上で、PRを日本語AW教育に導入する際に得られる教育的示唆について考察した。PR活動では、多様なScfを介した支援的な相互行為が展開されており、その相互行為のあり方は固定的で不変なものではなく、活動の内外における社会・文化的な文脈や多様な要因によって状況づけられながら、動的かつ可変的に展開していくものであることが示された。また、PR活動において学習者は「主体的で能動的な存在」であり、PR活動は単に問題解決や知識構築を実現する主体的・対話的な授業活動として機能するだけでなく、それを超えた人間教育としての意義を持つ場であると言える。さらに、PRを日本語AW教育に導入する際に得られる教育的示唆として、「対話の場の構築」、「Scfの生成への支援」、「情意面のサポート」の3点を提示した。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　蔡 苗 苗　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	村岡　貴子
	副 査　教授	義永美央子
	副 査　准教授	西出佳詩子

論文審査の結果の要旨

本論文は「アカデミック・ライティングにおけるピア・レスポンスによる学習間の相互行為とその学び －社会文化理論の視点に基づくスキャフォールディングの分析から－」と題し、日本語学習者間の相互行為の特徴と相互行為から構築された学びの状況を明らかにすることを目的として作成された独創性ある論文である。

序論、第2章、および第3章では、かなりのページを割いて本研究の背景や理論的枠組み、多数の先行研究について丁寧に議論が行われている。序論では、現在も増加し続ける日本の大学院への進学希望者に対して、日本語アカデミック・ライティング（以下、AW）教育の一環として研究計画書作成やテーマ設定への適切な支援が重要である旨、現状認識について記述されている。次に、第2章と第3章では、本論文が依拠する理論的・分析的枠組みについて、国内外の関連文献を深く読み込み、本研究でのキーワードである「対話」「協働」「相互行為」について議論を行った上で、AW教育におけるピア・レスポンス（以下、PR）では、成果物の文章のみを評価するのではなく、創発的な社会的相互行為の視点からAWの過程を論じる必要があることを主張した。同時に、本研究が重視するPRの理論的背景や、日本語教育における多様なPRの実践的取り組みを説明し、その意義と課題についても概観している。その上で、PR活動の過程で行われる相互行為と学習・発達との関係については従来、十分に検証されているとは言えない状況を指摘し、それらを明らかにする研究の価値や新たな視点の導入について論じている。加えて、本研究がオンライン形式による実践をデータとして活用していることから、ICTを活用した遠隔協働の可能性についても言及されている。さらに、本研究にとって重要な理論的枠組みとして、ヴィゴツキーの発達観に基づく社会文化理論の説明を行い、「発達の最近接領域」「スキャフォールディング」（以下、Scf）「概念発達・変化」の3点を詳述し、関連の先行研究に言及した上で、本研究の研究課題を示した。

第4章では、研究方法として、日本の人文社会系大学院への進学希望者を対象とした、研究計画書作成支援の学習活動を含む12週間の支援活動と調査協力者12名の属性を提示した後、学習活動内のPR活動の目標や進め方の手順が記述されている。データは、PR活動の談話データ、活動後の振り返りシート、フォローアップインタビューデータ、PR活動前後の研究計画書に加え、フィールドノーツ、および学習者とのプライベートメッセージ等、膨大な量にのぼり、また、倫理的配慮にも言及されている。

第5章では、PR活動における学習者間の相互行為の特徴を、Scfにフォーカスすることによって明らかにした。先行研究で示されているScfの定義と分類は、多様であり必ずしも統一的ではない状況があることを指摘し、先行研究を参照しつつも、本研究では、学習者間の談話データを分析した上でAWにおけるPR 活動の文脈に適した新たな分析の枠組みを設定した点も注目に値する。この枠組みは、目的と方法に分類され、目的は《方向付け》《解決策提示》《発想・思考の支援》《修正示唆》《不安の軽減・動機付け》《発言行動補助》という6つのScf、方法は「ヒントの提示」「質問」 「確認」「説明」「換言」「要約」「承認付与」「褒め/勇気付け」という8つから成る。Scfと認定された事例とその種類を示した上で、結果として必ずしもScfが十分に機能しなかった不成功事例についても明示されている。上記の分析的枠組みと認定基準に基づいてコーディング作業を行った結果、《方向付け》が最も多く、続いて《解決策提示》《発想・思考の支援》《修正示唆》が高い頻度で観察された。一方で、《不安の軽減・動機付け》《発言行動補助》は、4グループ全てにおいて出現頻度が低かったという。また、Scfの機能としては、1）開かれた対話の構築、2）認知的問題の解決、3）他者の内省と自己修正の促進、4）対人関係の維持・調整、5）意味交渉プロセスの促進、の5点が確認された。こうした対話におけるScfは、被援助者からの応

答や援助要請で引き起こされることもあり、援助者からの一方的な行為と断じることはできず、被援助者の発話や行動に応じて両者の間において動的に調整・構築されるものであることを明示している。

第6章では、Scfの分析から、グループ間の相互行為の特徴を比較し、かつ、グループ間の相違の原因を探っている。まず、3つのグループの各データを、Scfの出現頻度、種類・談話展開、対象という3点から丹念に分析した結果、各グループの活発な活動の蓄積状況や、一時的に見られた沈滞の状況等、さまざまな様相が見られ、各相互行為の過程におけるScfの種類と対象には明確な違いがあることを明らかにした。次に、こうしたグループ間の相違が生じた要因を探るべく、PR活動後の振り返りシートやフォローアップインタビューもデータとして活用し、質的に分析した結果、学習者の主体性、予備知識・意識の違い、および調査者の働きかけという3点が影響したものと結論付けており、こうした多数のデータを丁寧に精査した成果が、説得力ある記述で示されていた。

第7章では、学習者間の相互行為による学びが生起する状況を分析している。まず、PR活動の中でScfが行われた際に注目された対象は、引用、文体と表現、論理展開と構成、その他、の4点であった。《解決策提示》《修正示唆》《方向付け》を中心としたScfの展開が見られ、また、Scfを介した相互行為は、学習者自身の問題点への意識化や理解の深化に繋がることも確認された。こうしたPR活動では教師の介入は常に必要とは言えず、学習の難易度が高いと思われる引用や論理展開についても相互行為が展開され、学びを促進する対話の場として機能している状況を鮮やかに示している。加えて、学習者が研究テーマを深化させていく過程も、ヴィゴツキーの概念発達の理論をふまえトランザクション対話分析（TD分析）のカテゴリーに基づいて分析・考察し、可視化に成功している。

最後に第8章では、社会文化理論の視点から見たPR活動の意義を示した上で、PRを日本語AW教育に導入した場合に得られる教育的示唆について考察している。すなわち、PR活動で多様に見られる相互行為のあり方は不変的なものではなく、社会・文化的な文脈や多様な要因によって状況づけられ、動的かつ可変的に展開していくものであると議論されている。そこでの学習者は「主体的で能動的な存在」であり、PR活動は主体的・対話的な授業活動であることを超えた、人間教育としての意義を持つ場であると主張されている。その上で、教育的示唆として、「対話の場の構築」「Scfの生成への支援」「情意面のサポート」の3点が提示されている。これらは本研究の大量のデータを緻密に分析し、批判的思考を伴った深い考察に基づいたものと評価できる。

以上の通り、全8章から成る本論文は、評価できる点が多々見受けられる。以下では俯瞰的に、高く評価できる論文であることの証左を3点に集約して示す。

まず、本研究の着眼点の新規性と独創性である。AWにおけるPR活動は、その価値や有効性が示され、種々の実践が散見されるようになって久しいが、本研究のように、PR活動において連綿と見られる相互行為の数々に対し、Scfの分析を取り入れ、多様で膨大なデータを対象とした微視的で緻密な考察を経て、学習者間の相互行為とその学びを生き生きと描き出した研究は他に見られない。教師は、学習者の相互行為から生み出される知見や、その相互行為から見出される学びと成長、さらには、学習者同士の価値ある協働活動の可能性について、目を見開かされるであろう。AWにおけるPR活動に関連する今後の研究に対し、新たな一石を投じるものとなることが期待できる。

次に、本研究の独創的な論述を強く支える理論的背景や手法についても、使用言語を問わず、多数の先行文献からその歩みを紐解き、それらの知見を着実に活用できている点である。そのことにより、本研究は、日本語教育学の中で新たな研究として確実に位置付けられたものと言える。先行研究への吟味とその記述は秀逸であり、研究者としての批判的かつ慎重な姿勢がうかがえ、これまでのたゆまぬ努力が結実したものとして高く評価したい。

さらに、本論文が理解しやすい論理展開のもと、かつ、選び抜かれた表現によって、説得力を持って記述されている点である。論文著者として、真摯に研究に取り組んできた姿勢が、本論文には一貫して明らかに見てとれる。本論文は、論文著者としての高度な執筆能力を有することも示した力作であると評価できる。

なお、批判的なコメント授受に関して、意見の対立を避ける傾向が文化的にあるのかについての議論や、Scfが不適切で支援が不成功に終わったというケースに関する記述等は、Scfの現実として興味深い内容である。欲を言えば、さらに加筆があれば一層論文の質を高めたと思われるが、しかし、そのことは本論文の価値を決して損なうものではない。また、AW教育への貢献を目指すならば、学習者が自力で研究計画書を作成できるようになることが最終目標と言えるため、研究計画書のプロダクトへの着目と精査の必要があることも指摘できる。ただし、そのことは、今後の課題として本研究の一層の発展の可能性を秘めたものとして期待したいと考える。

以上のことから、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。